明治文學私見

明治文學の出發に關して

松岡滿夫

序

西洋文學史ではロマンチシズム（浪漫主義）は大體十八世紀の半ばから十九世紀の半ば頃にかけて行われた文學運動で、その前はクラシシズム（古典主義）、その後はリアリズム（寫實主義）で、その間に位置づけられた。その主義の要素は理性に對して感情の權威を主張する。この主義を奉ずる者は多く個人主義者で社會の傳統法則に對決して自由に考え、自由に行動し、自由に書いたのである。その結果告白體の文學が生れた。どの時代にも見られなかつたような、あけすけな文學、思いのままに情熱にまかせて空想を働かせる心情本意の文學となつた。一般的抽象的な描寫を好まず、時代や地方の相違、個人の特色を生かして、人生の內外面を美しい筆で具象的に描こうとした。從つて普遍的なものの、國家的なものよりも、地方的なもの、時代的なものを愛し、人間の心理の正確な描寫に力を入れた。然しその赴く所は、その奔放な想像が科學的精神の裏打がなかつたため、ついに空想となり、現實を超越して歷史の過去へさかのぼつてしまつたといわれている。

西洋に於けるロマンチシズムの要素はかくの如くであつたが、日本では江戸時代を終るまで、かくの如き意味でのロマンチシズム運動はなかつた。明治となつてから、卽ち十九世紀の後半から二十世紀の前半にかけては、西洋の長年の文學運動から潮の如く押寄せた色々の主義思潮が雜然として渦卷く有樣となつた。ロマンチシズムの申子である告白文學も、明治に於ける日本のロマンチシズムからは生れ落ちず、むしろリアリズムやナチュラリズム（自然主義）から生れている。明治のロマンチシズムは思想とか主義の形を際立ててあらわれたのではなく、情緒的に胎動を始め、感情的に展開して行つたのであるから、明治文學に於けるその情緒の樣相・性質がどんなであつたかは、色々なそれを取卷く不純物を洗い落して、能う限り明治人の步みの中にロマンチシズム情緒を讀み取ろうと努力せざるを得ないのである。

一、洋學者と文學

○福澤諭吉

明治文學の出發は江戸時代末期の文化人、それも主として幕府の費用で外國の文化を學びとつた人によつてなされている。これらの文化人は幕府の崩解と同時に或者は明治新政府の役人となり、或者は野に下つて操觚などの職についたが、彼らの中で文化的な人物は單純な官僚とならず、西洋の新思想の取入れに努力し、又野にあるものは明治新政府の權力や斷壓に抗して自由を叫び、その主張を新しい文化機關として登場した新聞雜誌に發表して啓蒙運動に努力した。かかる運動を冷靜に見つめる時そこにロマンチックなもののあることを認めざるを得ない。勿論人によつて色合を異にしてはいる。例えば福澤諭吉を見よう。（天保五年十二月十二日生明治三十四年二月三日歿）

この人にロマンチックなものがあると論ずれば人はあやしむであろう。彼は全くの英米式實利主義者であり、金權主義者であり、機械文明の謳歌者であり、歐米で勃興しつつあつた資本主義の禮讃者であつた。その彼に何のロマンチシズムがあろうと一應は考えられる。しかし諭吉の舊體制に對する反抗精神は明かにロマンチシズムを發揮している。傳統精神に抗して自由に行動し自由に考える彼の文化活動は慶應の初年（一八六五）から明治十年（一八七七）頃までの啓蒙的出版物に最もよくあらわれている。ただ彼は英米の實利思想に強く影響されたがために――それは彼自身の性格に根ざすもので、どうにもならないものと思われもするが――文學を實學もしくは究理學より一段低く見ていたことは確かである。隨て行動に於てロマンチックな男であつたが情緒的に卽ち文學的にロマンチックな男ではなかつたと思われる。例えば『西洋事情』（慶應二年版）の中に文學技術という項目が見えるが、その中に「千四百年代に至るまでは世の學者詩歌を玩び小說を悅び實學を勉る者少し千四百二十三年版刻の發明ありし後も文學大に進步し經學性理詩歌歷史の學は其盛美を極めたれど獨り究理學に至ては然らず」と云つている。これは明かに彼が文學（詩歌）を究理學（科學）より一段低く見ていたことを示している。又『學問のすすめ』（明治五年第一篇―明治九年第十七篇）の初篇に「學問とは唯むづかしき字を知り解し難き古文を讀み和歌を樂み詩を作るなど世上に實のなき文學を云ふにあらず、これらの文學も自ら人を悅ばしめ隨分調法なるものなれども古來世間の儒者和學者などの申すやうさまであがめ貴むべきものにあらず」と言つている。

和文家や歌人の古ぶみをのみ尊ぶ態度をあざけつた諭吉の考えは正しい。然し諭吉はその考えをもととして新しい日本文學や和歌を作ることをしなかつた。これは彼が本質的に文學人でなかつたからで、近代日本文學の第一頁に諭吉を出すのはその意味で正しい態度とは思われない。とにかくそういう彼であるから彼は文學の革新よりも文章文字遣の革新を重視した。『文字之教』（明治六年十一月發兌）の端書に「日本に假名の文字ありながら漢字を交へ用るは甚だ不都合なれども往古よりの仕來りにて全國日用の書に皆漢字を用るの風を爲りたれば今俄かにこれを廢せんとするも亦不都合なり今日の處にては不都合と不都合と持合にて不都合ながら用を便ずるの有樣なるゆへ漢字を全く廢するの說は願ふ可くして俄に行はれ難きことなり此說を行はんとするには時節を待つより外に手段なかる可し」といい又「時節を待つとて唯手を空ふして待つ可きにも非ざれば今より次第に漢字を廢する用意專一なる可し（中略）漢字の

數は二千か三千の數にて澤山なる可し」といつているが傳統的文章や文字遣を批判するのは正しい。ただそれが便不便をもととする功利的立場にあることは注意しなければならぬ。今日と雖も漢字制限・文字改良の論は冷靜に考えれば功利的態度を有することは否定出來ない。諭吉は早く西洋事情（慶應二年）の稿をなすについて或人が漢學者に文章を訂正して貰つてより立派なものにしたがよいと注意した時彼は、それは自分の希望する所ではない。ただいたずらに飾つても眞の文章とはならない。勉めて俗語を用いても達意を主にしてその目的を十分にはたしたものはそれだけで立派な文章であるというような意味を以て答えた。彼は最初から達意の文章という立場で筆を取つて居り、彼の文章はその意味ですぐれた文章といわれている。（先蹤としては心學の文章があり諭吉のモノポリイではない。）

諭吉の自傳によると、若き時大阪の大學醫緒方洪庵の門に遊び、先生より「當時の武家は大抵は無學不文の輩のみにて是れに難解の文字は禁物なり」といわれたことが肝に銘じて忘れられず、更に鄉里中津で家兄がその朋友と文章に就いて論じ合つているのを聞いたが、その折家兄の「和文の假名遣いは眞宗蓮如上人の御文章に限る、是は名文なり」といつた詞が固く念頭から離れず、後年江戸に出てその御文章を買い求め研究したのであつて、それが後の彼の達意の文章道に功果を表したわけであつた。この事から見て彼の文化運動は西洋の新事情を無學の武家にたやすく讀ませようとする所に行われ、蓮如上人の御文章の如く諭吉の說く道を人に信ぜしめようとする所に意圖を置いていたことがわかる。福澤宗という言葉があつたことも無理でない。

○　西周と中村正直

そもそも洋學の精神は浪漫的精神である。傳統や過去を否定して新奇なものを求め從來この國になかつた何か新しいものを創造せんとする態度にはなにがなしに浪漫的なものが漂う。諭吉はその意味での洋學者の代表的なものであつたが、本來商估的な目先の鋭さのみに走つて、根本的な重々しさが乏しかつた。諭吉の著作が多く原書の摘要紹介に過ぎなかつたのもこの彼の本性を示している。いわば學者的でなかつたのである。それが故に却てその著作がよく世人によまれたのであろう。今學者的な態度を以て新精神を發揮しようとした人を探すとすれば誰しも西周、中村正直の二人に指を屈するであろう。

西周（文政十二年（一八二九）二月三日石州津和野生、明治三十年（一八九七）一月二十九日歿）は數々飜譯述作をしたがその飜譯は大抵漢文を以てし、今日よむには一般向きでないが、百一新論（明治七年刊二册）の如き述作は達意の文を以てし、廣くよまれ、その時代にかなりの影響を與えたようである。法や教を心理の問題とし、この心理の問題の他に物理の問題があり、この二つによつて世界が形造られていると說き、この論では主として心理の問題を論じた。卽ち法と教、いいかえれば法律と道德の問題であるが、その二つの異同を考え、それと古來の禮法との關係に說き及ぼし、更に西洋の批判的解釋を以て東西思想のつながりを考えたのである。その考え方は理論的でその意味でも諭吉の如何にも割り切つた唯物的態度に比し、唯心的で且つ重々しく感ぜられるのである。周にも文字改良としてのローマ字論がある。明六社雜誌第一號（明治七年三月刊行）にのせた「洋學ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」がそれで、そのいう所は——

國の不開化は人民の愚によるもので政府のみの罪ではない。人民の愚をなくするには學と術とを廣く人民に行きわたらせるべきで、その學術を貫道する器は文章である。從つて文章の改良はこれまでしばしば試みられた。即ち漢字の數を減ずるの論、和字のみを用いるの論などがそれである。しかしここに更に一つのよき試みとして洋字を以て和語を書する法があつてよい——と周はいうのである。周のローマ字論も結局功利的立場にあることはいう迄もない。洋學を以て和語を書するにその利十あるに對し、害はわづかに三あるのみと結論を下している。ローマ字論はとにかく、文學に關する周の論として注意すべきは文學の部門の分類を西洋より學んで發表していることである。それは明六社雜誌第二十五號（明治七年十二月刊）の知說五に見える論である、（偶評西先生論集土居光華批評萱生奉三編次明治十三年四月版にも所載）。次にその要領を表解して見よう。

文（學を文、數、史、地と分ける）
- ○グレマル（語學）
  - 1 文字論 オルソガラフイー orthography
  - 2 語論 イチモロジー
  - 3 句論 シンテキス
  - 4 讀法 プロソジー Prosody 作詩法 韻律學
- ○散文 プロス
- ○レトリック（文學）
  - ○說述 オレトリー
    - 散文
      - 悟性 1 アンドルステンディング 敍事體
      - 理性 2 リーズン（ロジック） 議論體
      - この他 ロマンス（學史） フエーブル（戲乘）
    - 詩學 ポエトリー
      - 1 エピック（賦體）
      - 2 リリック（興體）
      - 3 バルラッド（俚曲）
      - 4 ソング（讃歌）
      - 5 ダラマー（套語） 註 アリキタリ語
        - 1 コメヂー（所作事 譚語）
        - 2 タラジジー（愁歎場）
  - ○文學 レトリック
    - 1 表明體 デモンスタラチウ demonstrative
      - 詩學
      - エルス（句）Verse
      - ライム（韻法）Rhyme
      - メートル（句法）metre
      - スタンガ（章法）stanza
    - 2 思量體 デリベレチウ deliberative
    - 3 審辨體 ジユジシウス judicious
  - 說辭 イロクエインス

周はこの智識を何から得たか私は知らない。百科辭典中の文學解說、誰かの文學論乃至修辭論からであろうが、いづれにしても西洋文學論の直輸入であつた。しかし當時としては新しい、しかもよくまとまつた知識で文學に關する西洋風の新しい考察の基礎はこれで築き上げられたといえよう。ただ周がこれを手がかりとして文學作品をどう理解していたかは今の私にはよく分らない。恐らく周は自由人的な文學者ではなかつたであろう。先づ彼は官僚として成功した人である。從つて進步的な彼ではあるが彼から文學作品は勿論文學批評をも期待することは出來なかつた。その點は正直の西國立志篇（明治四年刊十一册）や自由之理（明治四年刊）は青年層に非常な歡迎を受けたがそれは時代が西洋の新しさを求める情熱を持つていたからに他ならぬ。立志篇、自由之理の序文を見てもその思想の如何に世論に先立つて步いていたかを知るのであるが――例えば（國政は人民の光の返照なり）といい（人民は政治の實體にして政事は人民の虛影なり）といい、又（夫西國之强は人民篤く天道を信ずるに由り、人民に自主の權有るに由り、政寬に法公なるに由る）という、それらを思いみてもわかるのである。正直自身は洋學者ではあるが本質としては儒者であり從つてなお西洋の自主的文學觀は持つていなかつたと思う。

西國立志篇（Samuel Smiles の Self-help）の飜譯文體は漢文訓讀書下し風のすぐれた、しかも達意の文體であり、諭吉の意譯風とは別の味いを持つて居て後の飜譯文體に多少の影響を與えたに違いない。しかしこれを時代が歡迎したのは諭吉の西洋事情を歡迎したと同じ時代の風潮の然らしめる所で新しい文學を要求してではなかつた。譯者自身も新しい文學を作る意味を持つていたのではない。むしろ倫理的な意味での著作で人民の教化に盡そうとする意圖を持つていた。諭吉は西洋文化の進步を功利的に紹介する傾向を持つていたが、正直は文化發展の根本に倫理を見ようとしている。即ち彼が儒教精神に則りながら基督教を肯定しようとしたのは西洋文化の深みに基督信仰のあることを見出したからである。ただ彼は信仰そのものに共鳴してそこから新しい情緒を見出そうとする態度はとらなかつた。

（中村正直は明治二十年三月、米國丁韙良（ティラー）の天道溯原に訓點を施しこれを出版している。）これら洋學者に文學者としての素質を見出すことは出來ないが、これらの人の他に特記すべき文學者があつたか。明治時代の初期には江戸時代の引きつぎとして草双紙の著者は澤山いたが、それらの作者に新しい文學を見出すことは出來ない。矢張新しい文學は別な所になければならぬ。そのために一わたり見渡す時わづかに成島柳北を見出す。福地櫻痴も考えられはするがこの人には文學的素質の乏しさの故に今ここで考えようとするロマンチシズムの流れには入れられないようである。

○成島柳北

成島柳北がロマンチストであるというには反論があろう。私も敢えて彼をロマンチストとは言い度くない。然し彼の雜文の中にロマンチックの氣味のうかがえることまで否認したくない。

もともと彼は幕臣であつた。父（稼堂）の後を繼いで儒を以て仕え「東照宮實記」五百餘卷の編輯を監督し父の著「後鑑」三百七十五卷の訂正をなしている。安政三年侍講となり、一度文久三年閉門を命ぜられたり

したが、慶應元年には拔擢せられて歩兵頭となり、祿千石、同三年騎兵奉行に昇進祿二千石を賜つている。卽ち純乎たる幕臣であつたが素質的に文人的な所があり、八歳にして既に自ら和歌の集を作つた。然し歌人として生長せず、早く安政六年に柳橋新誌初編をあらわして文名を揚げた。彼の眞價は維新の變革に際して野に下り、明治五年歐米を漫遊し、六年歸朝、七年朝野新聞社長となつて雜文を書き始めてから發揮されたのである。明治七年柳橋新誌二編が作られ九年に三編が作られた。三編は直に發行禁止となつて、序文のみが今日傳つている。柳北の文學は雜文につきると言つてよい。漢詩和歌はいくらかあり、明治二十七年には柳北詩抄も出ている。物語小說に類するものはない。文人として第一流の人ではなかろう。柳北は閉門中に洋學に入り、明治になつて歐米を漫遊し、泰西の新知識を取り入れているが、元來儒學に鍛えられた人だけに西洋文學或は西洋の思想の影響は彼の文章の上には少くともあらわれていない。彼が西洋の詩學を知つていたことは「いつまで草」中の「書[註1]喫霞仙客花押說後」を見てわかる。西洋の詩學を眼にしたが故に彼を進歩的であるとはいえない。その人の文學の優劣は知識の多少によらず、情の厚薄によると考えれば、その情の上で柳北は多感な才子であつたと見られる。彼を明治ロマンチストの最初に置く理由もここにある。早く柳橋新誌第一編に於て花柳の世界を批評したのも彼が情を重んじたことを物語つている。花柳を愛するが故にロマンチストというのではない。德川封建制の正に頽れんとするに際し武士階級の政治的墮落をアイロニックに痛罵せんとする所に柳橋新誌の成立事情がある。明治になつて新たに二編を作つたのは明治新政府に對する批評に基くのである。アイロニックな立場にあるものは所謂白眼的で從つて隱士的な趣がある。柳北も自ら明治元年の秋、澁上隱士傳を書いている。その一節を引く。

隱士生れて人に短なる所少なからず、色を好むこと甚し、酒を嗜むこと亦甚し、百般の遊戯好まざる所なく、好て人を罵り、世に悖る。何事をなしても、無益の勉强をなさず、ややもすれば懶慢を樂んで檢束せずこれ短慮なり。然れどもまた長處あり、人と爭ふ事を好まずして、人に欺かれず、己に利すると雖も、人の害となることをなさず、遊蕩に耽るといへども、常に家國の安危を心にとどめり、これ長ずる所ともいふべき歟、隱士妙齡より今日に至るまで、遊戯連年いまだ其倦たるけしき見ず、古の所謂情癡なる者歟、隱士風雲花月の妙處に逢ふ時は涎を流し、魂を飛し、酒を把て陶々として樂む、時に詩歌を草す所謂風流客なる歟。隱士盛宴に臨み紅裙前に滿るに當て、時として感激扼腕、嬌娜の色も眼に上らず、痛憤按劍の志あり、所謂慨慨悲壯なる者歟。士頃者一書を讀まず、一事を爲さず、空々として日を涉る。所謂馬鹿なる者歟。

柳北の文學を隱者の文學として考えようとする人がある。語義の上では隱士、卽隱者とも見られるから、それでもよかろう。然し柳北が自ら隱士という意味は世捨人の隱者でなく反撥者のそれであつたと思う。隱者にはあきらめ、解脫があるが、隱士には反抗があり白眼がある。時を得れば雲に乘つて昇らんとする氣慨がある。柳北が花柳の社會に沈湎するのも權勢富豪の趣と異つていたようだ。永年荷風が柳北を仰ぐ心持もわからぬではない。

柳北の書くものに批評があるのは彼のかかる隱士的態度のしからしめる所である。かかる態度は江戸時代の隱士によく見る所で、柳北文學の源流としては彼がよつて以て範とする所の寺門靜軒をあげねばならぬ。（橋新誌の序參照）

靜軒には江戸繁昌記[註2]の編著がある。天保三年より毎年出版され六編ま

で出た。（二編、三編は天保五年版）別に江戸繁昌後記もある。此の書の價値は著者が江戸市中の風俗を細かに寫し取つたという點にあるのではなく、著者獨特の人生觀（老莊に影響された虚無觀、彼は官儒ではなかつた）による批判がその文章の至る所にあらわれているからである。彼自らはその序文によると天保二年微恙にかかり聖經を見るにものうく、つれづれのあまり江戸繁昌記を書いたがこれも窮巷の浪人が餓えずして圖書叢内に臥遊することが出來る太平の德澤のしからしめる所だとうそぶいているが、これは恐らく逆説的に見なければなるまい。それは文中所々に見える時世への鋭い批判が證明する。一例を意譯して紹介しよう。

明和年間に女相撲が大に行われた。これは支那の趙宋の世にもあつたことで同じく奇拔な催物であつた。この頃兩國の見せ物で聲と女とに角力をとらせるということである。これは奇拔を通り越している。私は去年或人の家を訪れた時その人から先輩の儒者を角力番附のように東西に分けて並べたものを見た。ところでこの頃又現代の儒者を番附にしたものを見た。いづれも奇拔なものだ。然し現代の儒學中一人として横綱の金剛力を有つものはいまい。ただ名を賣り利を射る手合に至つては四十八十どころではない。虎の威をかり、無い力を張り上げ、狸の術を舞はして虚名を得んとすること、全く隼が獲物をつかみ、獅子が獲物を前にして哮るようで、ただただ死力を盡して世間の喝采を得ようとしている。だから周圍のお客からハナが紛々と降つてくる。儒者でも下の下は書畫會の手段に訴えて東奔西走一生懸命に生きんともがいている。フンドシかつぎが土俵で死力を盡しているのとよく似ている。

之を今日の學者と呼ばれる一團の連中にあてはめてみたらどうだろう。これで見てもわかる如く江戸繁昌記の價値は風俗に關することよりもその人間批判の妙味にある。ただ靜軒の批判は人間の弱點をえぐり出すのであるが、靜軒を範とした柳北は人間の弱さを弱さとして認めようとしている。從つて柳北は特に花柳の世界に人間を見出してかの藝者の人生からも何らかの價値を見出そうとしているようである。花柳の世界に價値を見出すというそこに儒教的人生觀に對する批判があるが柳北は更にそれを一轉して耽美的態度を以てそれを眺めている。この耽美的態度は柳橋新誌が早く彼の幕吏であつた時に出版された所から本質的に彼の性格に結びついていると思う。明治になつて野に下つてから無用の人たることをうそぶきつつ益々耽美的態度に沈潛して行つたのもわかる氣がする。柳橋新誌の初編と二編とをよみくらべて見ても幕吏時代と明治時代との差を見得る位に彼は耽美的になつて行つた。明治時代のロマンチストの先驅者として彼を見ようとする私の理由はここにある。先づ初編の中から拾い上げる。これも意譯である。

◎ああ人情のうらがえり、ただ金次第金があつたら馬鹿もお利口、おかめも美人。

◎孟子は「志を得て宰相となつても山海の珍味をつらね、侍妾數百人を蓄えることはしない」と言つたがこれは負け惜しみだ。孟子はその説く道行われず、言うことときかれず、從てはじめから出來ない相談だ。實際にその境遇を得たら孟子もよろこびの余り夜も寢られないだろう。おれもこういう事が出來たら狂人の如く躍り上つて死んでも悔いまい。

◎おれは友人に問うた。「藝者を迎えるのは藝の腕前と容色による。この二つのない藝者は取る所がない。そんな藝者を呼ぶより家のおさんどんの顔でも見ているがよい。」と友人は笑つて答えた。「お前は藝者の一面を知つて他の面を知らない。都内に遊客は澤山居る。それらの人の心は各々異る。藝や容色を好む者もあろう。しかし又氣前やスタイルを好む者もある筈だ、勇み肌でけちけちしない藝者は一般家庭の婦女子には求められないよさを持つている。容色は惡くてもスタイルがさらりとあかぬけして、その起居振舞の一々法にかない、話をしてもあかせない、こういうことは奥さんや下女には求められないこと

だ」と。おれはこれを聞き感ずると共に日頃の疑がさらりと晴れた。ところで又一つの疑問が生れた。それはこうだ。藝者は藝なく色なくしても尙取る所がある。しかるに世の儒者醫者はどうだ。同じく者の字をつけているが儒者の中には四書六經が何の道であるかも知らぬ奴が居り、醫者でありながら素問靈樞が何の方であるかわからぬ奴が居る。こんな手合は藝者の藝のないのと同じだ。藝者の藝のないのは友人も言う如くまだしも取る所があるが、この連中には色々考えて見たがああ遂に何の取る所もない。勿論この疑問を人に問い質すがまでもない。考えても見よ。儒者の修身濟家の講釋よりは端唄はやり唄の方がよつぽど民衆の耳に悅ばれている。醫者の加減する匙よりは藝者の象牙の撥の方がむしろ氣を奮い立たせ血の廻りをよくしてくれる。世を濟うとか人命を司るとかいうが婀娜たるかよわき女にも劣るではないか。……おれが哀しんだり笑つたり又涙したりして之を記すのは人を罵るつもりではない。おれも儒を學んだもののはしくれだ。だから自ら罵り嘲るだけの話だ。アハヽ」

金錢に左右されるのも庶民、端唄やはやり唄を悅ぶのも庶民、政治家や官吏がいくら高く嘯いても金錢名譽に使われる點に於て庶民である。彼らと雖も待合に出入すれば端唄にうつとりすることもあろう。そういう庶民の世界をそのままに肯定してそこに價値や美を見出そうとする所に柳北の立場がある。かかる庶民性は江戸文藝の持つ特色で別に目新しいものではないが江戸後期に於ける文藝の庶民性は階級的卑下の上に成立しているような趣があるが、靜軒、柳北は堂上武家儒者醫者卽ち當時の官僚遊民の特權階級を一括して庶民の地位にまで引下してしまつた。柳北の靜軒と異る所は靜軒の諷刺が上層階級に辛竦であり過ぎたに對し愛情の絹によつて上層下層すべてを包み込もうとした點にある。男女の愛こそ柳北の最も尊重する所で、かのロマンチストが本能を崇高視する點に於て彼も一人のロマンチストであると思う。柳橋新誌の二編に或大名が柳橋の一藝者との別れに臨んで女に送つた手紙をその名を祕して轉載しているがこれは大名を嘲つたのではなく、その大名がおのれの地位を忘れて綿々の情を盡した人間性を立く評價しているように思われる。柳北が情を重んじたことはリットンのマルトラバースの織田純一郎譯花柳春話の序（緒言）に最もよく語られている。

草木情無キ耶曰ク無シ。然ラバ則多情無比ノ溫柔鄕ハ何ヲ以テ花柳ト呼ブヤ。曰ク說有リ、花ノ情無キモ芳唇笑フガ如ク嫣然トシテ雨中ニ開クヤ誰カ看テ情無シト謂ハン。柳情無キモ嬌腰舞フガ如ク、梟然トシテ風前ニ立ツヤ誰カ看テ情無シト謂ハン。況ヤ圓顱橫目同ジク人ト生レシ者ニ於テヲヤ。獨リ其ノ情痴吾徒ノ如キ者ノミナラズ。大聖モ亦情ニ深シトス。禮運ニ云ハズヤ、人情ハ聖王ノ田也ト。情無ケレバ聖人モ亦食ハズシテ死センカ。聖既ニ多情、痴固ヨリ多情、然ラバ則全地球上一切情界ノミ。下略

かく情を重んじた柳北文學が當代の文學にかなりの影響を與えて繁昌記風のものが次々にあらわれた。然しそれらは柳北や靜軒の精神を理解しなかつたらしく文章としても讀むに足る趣のないことは無論、世相に對する辛竦な批判もなくただいたずらに江戸繁昌記や柳橋新誌の名を高からしむるに過ぎなかつた。今ここにはそれら繁昌記物のうち私の讀み得たものの名前をかかげて置くにとどめる。

都繁昌記　中島棕隱軒編　慶應三年版

東京新繁昌繁記　服部誠一著　初編明治七年四月版

註、文學大辭典によると明治七年より同九年迄に完結とあるが五編は明治七年十二月版であるから、六編は後れて九年に出たのであろうが私は六編は見ていない。これは後に復刻された筈である。それも見ていない。柳橋新誌二編は明治七年二月に初編は同年四月再刻この二つの繁昌記の出版年月に注意したい。

西京傳新記　菊池純（三谿）著　初篇二篇　明治八年一月發兌

註　奥付には明治七年十二月二十七日とある。

文明餘誌田舍繁昌記　松本萬年著　初編二編　明治八年一月新刻

方今大阪繁昌記　石田魯門著　初編　明治九年十一月版
　　二編　明治十年四月版

京都明治新誌　松岡彦二編　明治十年六月發兌

新編東京繁昌記　初篇　吉田淞北著　明治十四年五月出版

この他上海繁昌記、佛國巴里新繁昌記、龍動新繁昌記等があり、上海の分は漢文、他は飜譯（譯者丹羽純一郎）である。以上は繁昌記ものの一部で全部ではない。以てその流行を知ることが出來よう。

繁昌記物への影響の他に飜譯小說にも或程度柳北の主情精神の影響がある。それには柳北が題言を書いた花柳春話を先づあぐべきであるが、その後戀愛小說であれ政治小說であれ飜譯物に多く花柳春話に類した名前を見出すのはこの飜譯書が劃期的なものであつたためでもあるが又柳北の精神とも一筋通うものがあつたと思う。今春とか情とかの語を題名に入れた飜譯書を二三あげて見よう。

花柳春話　四編四冊　明治十一年　織田（丹羽）純一郎

花柳春話附錄明治十三年の序あり

菊亭香水の月氷奇遇艷方春話（十五年）（後に悲風慘雨世路日記）はこの花柳春話の影響を受けた明治人情本といわれている。

寄想春史　初編　明治十二年六月　二編　同十一月　三編十三年　三月
　　織田純一郎

リットンのポムペイ最後の日（一八三四）の抄譯であるというこれは賣行きが惡かつた。

春風情話　明治十三年　橘顯三譯（實は坪内逍遙譯）

橘氏は逍遙の學友の兄

スコットの「ランマアムーアの新婦」の譯

英國情史蝶舞奇緣　明治十五年五月　桑野銳譯

歐洲情譜群芳綺話　明治十五年六月　大久保勘三郎譯

ポッカチヨの十日物語（デカメロン）のフランス譯から譯したもの

春窓綺話（一名春江奇緣）　明治十七年刊　服部誠一纂述

主譯者　高田早苗、坪内雄藏、天野爲之

スコットの湖上の美人の譯

春鶯囀　明治十七年　關直彦譯

ビコンスフィールド伯ヂスレリーのコニングスビーの譯

明治二十年頃までは所謂歐化主義時代で政治、文學、學問、風俗すべてにわたつて西歐風の新しく珍しいものを求めようとした。既に述べた洋學者の思想的啓蒙運動もこの一つのあらわれに過ぎず、ただこれら洋學者は實際的學問や倫理的思想の面を考察して文學的情緒を無視しようとした恨がある。柳北が花柳春話の題言で西洋にも人情があると言つたのは洋學者があまり實利道德の面ばかりを考えるのに對してはつきりと反撥を示したのである。織田純一郎が花柳春話を譯した目的も日本人に西洋人の人情風俗を知らしめるためであると言つている。勿論彼はかかる情史をよむことは英國史を理解する助けとなると言つて居り純粹に小說の價値を保持しようとする立場を取つていないので、その意味で彼を文學に徹した人と言うことは出來ない。

織田純一郎は三條家の用人の子で若い時朝命をおびて昌平校に學んだ。明治になつて實美の子公美の附添として英國に留學したが公美をして折花攀柳の人たらしめたというかどで出入を差止められた。友人が汝

男子ならば切腹すべしと言つたがそれがため丹羽の姓を織田と改め花柳春話が世の好評を得たので我一管の筆名を成すに足る何ぞ斗米に腰を折らんと言つて相變らず狹斜の巷に出入し黑縮緬の先生と綽名せられていたという。

人情を尊重するのは彼の性行に基くのであろうが、彼が天性文學的な人物であつたかに就ては割引して考えねばならぬ。刑法治罪法を警官に講說したり、日本民權精理、日本民權新論、政治家社會などの著書をものしたり、大阪朝日新聞の主筆に聘せられたり、彼も當時の政治思想に感化され人並の成功を目標としている。よりよき文學を作るために努力したのではなく世間をめあての著作に過ぎなかつた。晩年は窮迫して大正八年二月六十八歳で京都市外に歿した。

花柳春話は漢文直譯風の文躰である。服部誠一の校閲となつているから、彼の筆力の上に校閲者の力が幾分加つて居ると見たい。譯者は若い頃昌平校に學んで居り、校閲者は漢學者である。從つて漢文直譯文體を採用するのも當然であつた。漢文直譯のあの一種の調子の高さが讀者をして才子佳人の遭逢流離に涙を流さしめる。內容の目新しさの他に文章の上にロマンチックの情緒がある。花柳春話以後の飜譯小說を見ても、その文章は漢文直譯風、讀本草双紙系統の俗文、純和文風と三種あるが、漢文直譯風が初期ロマンチシズムに最も情緒的影響を與えている。或は詩的と言つたがよいかも知れない。漢詩漢文とロマンチシズムとは一見緣がないようであるが、江戸時代の文藝を顧みても、漢學系統はおいて、國文系統で最も詩的精神を發揚した芭蕉と蕪村の俳諧がその根底の一部に漢詩の趣味を漂わしていたことは疑えない。同時にこれら俳人は王朝の典雅な風味も決して忘却していない。明治の飜譯小說もその始め漢詩漢文調によつて情緒を湧き立たせ、やや後れて雅文調により一種のロマンチック風味をもたらしたのである。

又明治十年代には飜譯小說と並んで政治小說が流行した。否飜譯小說も政治的意味を加味したものが多く、それほど此の時代は文化的というより政治的時代であつたのである。かかる時代趣味を取り入れた政治小說も經國美談（矢野龍溪二册、明治十六年三月、同十七年二月）や佳人の奇過（東海散士、柴四郎十六册明治十八年十月より同三十年十月）の如きは漢詩漢文調を取り入れてリズミカルな情緒を表現している。經國美談は西洋史書の飜譯で材料をギリシャ史にとつて居り、原書に左右されなかつたとはいえ、內容的に當時としてはかなり知識的なものであつたと思う。文章も漢文調が基調となつて居て、それに雅文調を交えてやや和らか味がある。佳人の奇過はアイルランドやエジプト獨立運動の志士の國家回復の叫びを全編にわたつて漢詩漢文調の强い表現を以てして居る。結構が單調なため、全體として退屈を覺えさせられるが、一節一節の文章は愛誦するに足る。更に又この書は文中到る處に漢詩を入れて所謂慷慨的情緒を盛り入れようとして居り、當時の青年でこの書を懷に入れていないものはなかつたほどに吟誦されたという。

二、漢詩の文學

○ 巽軒詩鈔と逍遙遺稿

明治十年代には前代の名殘りとして漢詩漢文調が青年に愛せられた。いう迄もなく儒學漢學が教育の基礎としてまだ重んじられていた時代で

あるから漢詩漢文集もいくつか出て居り、それらを以て當代の文學の一面を代表するものと見做しても誤りではない。それら作品集の中で特に注意すべきものとしてここに『巽軒詩鈔』と『逍遙遺稿』の二つを選定する。巽軒詩鈔は明治十七年二月八日の出版、逍遙遺稿は明治二十八年十一月十六日の發行でその間十年餘のへだたりがあり後者をして明治十年代を代表せしめるに疑問を抱くむきもあるであろうが兩者の間に漢詩漢文によつて懷を述べる共通の場があり、必ずしも別にして考える必要はないと思う。

『巽軒詩鈔』は上下二冊の和裝本で著者は井上哲次郎、巽軒はその號である。(井上哲君廸著と署してある)。彼は安政二年(一八五五)九州の太宰府に生れ、明治八年(一八七五)開成學校に入り、次いで東京大學文學部に入り、哲學政治を研究するの傍中村正直、横山由清に就て國漢文を修めた。明治十三年大學卒業、同十五年東京大學助教授、十七年歐洲に留學、二十三年歸朝、文科大學教授となつた。順調な學者街道を歩いた彼は新進學徒として學界に論壇にかなりの活躍をした。晩年は官憲に忌まれて折角勅選された貴族院議員も東京帝國大學名譽教授も辭して不遇であつた。しかし明治十年代の彼は二十歳から三十歳にかけての青年時代で巽軒詩鈔は歐洲に留學するに當つての記念作品集ともいうべきものであつた。これより先明治十五年八月九日丸屋善七書店より『新體詩抄』が彼と矢田部良吉、外山正一と三名の共著で出版されて居り、巽軒は殆ど名前を貸すだけで僅かの作品しか寄せなかつたとしても文學人としての名は既に世間に知られていた。この新體詩抄は有名なだけ用語の不十分さが目立ち飜譯詩はともかく、創作詩では思想のなまな表出が多くチョンガレ節、阿呆駄羅經式とまで惡評されている。それに比すれば『巽軒詩鈔』は漢詩の形式であるからか、その作詩法上の出來具合は別にして、讀めばとにかくロマンチックの若々しさを覺えさせられる。作品數は多くないが偶成雜吟風のもの、先生や友人に寄せたもの、人情人事に關するものと割合に變化に富んでいる。又思い切つて人情的なものをよんでいることは從來の漢詩人には見られない事であろう。下卷の『孝女白菊』は後に落合直文が『孝女白菊』の歌という新體詩の形として明治二十一年二月東洋學會雜誌第二編四號に其の一、つづいて同年九月第二編第九號に其の二、二十二年第三編二號、同年五月第三編五號にその三を分載し、世間に愛唱せられて特に有名になつた。然し原詩である巽軒の詩は多くの人に忘れられている。直文の詩は巽軒の漢詩のそのままの和譯で、直文の白菊の歌に興味を覺えるものは必ず巽軒の詩に思いを寄せるべきものである。人情詩としては『袖萩』があり、短章としては『獵夫行』の如きがあるが、『孝女白菊』詩はそれと比較されない程の長編で材料を比較的身近かな事件であつた西南の役に取つて居り、それだけ作者の歌いぶりも情緒的であつたし、直文も大いに共鳴する所あつて之を和譯したものと思われる。(直文の和譯が出た時は巽軒はまだ歸朝していなかつた。和譯するについては交渉があつたと思うがその經緯を知る事が出來ない)。直文が和譯に取りかかる際、餘りに古言を用いるのは今の歌にそむき、長歌の五七調は調子が苦しく、短歌は言葉が少く、思いをつくす上では今様の七五調によるをよしと考えたことは彼自ら述べる所であつた。二つの詩體の與える情緒の差は相並べて見れば分る。

第一齣　　その一

阿蘇山下荒村晩　　阿蘇の山里秋ふけて
夕陽欲レ沈鳥爭返　　ながめさびしき夕まぐれ
無邊落木如レ雨繁　　いづこの寺の鐘ならむ
隔レ水何處鐘聲遠」　　諸行無常とつげわたる」
此時少女待二阿爺一　　をりしもひとり門に出で
出レ門小立空悲嗟」　　父を待つなる少女あり
鬢髮如レ雲風中亂　　袖に涙をおさへつつ
嬌顏春淺美二於花一」　　憂にしづむそのさまは
阿爺一朝衝レ寒起　　色まだあさき海棠の
芦花風外渡二野水一　　雨になやむにことならず」
曉月影昏野廟西　　父は先つ日遊獵に出で
遙々去入深山裏」　　今猶おとづれなしとかや
不レ知猶爲二遊獵一不　　軒端に落る木の葉にも
數日不レ歸何處留　　かけひの水のひびきにも
凄烟飛迷殘照外　　父やかへるとうたがはれ
望斷楓錦柿緋秋」　　夜な〳〵ねふるをりのなく

巽軒は此の詩に於て人間の運命の不可思議を歌つた。

少女白菊が遊獵に出たまま歸えらない父の行方を求めて單身山中に迷い入る。廢寺に尋ねあたつて山僧に身の上を問われありのままに答える。即ち少女はもと武士の娘で熊本城南に住んでいたが、一朝兵亂あつて人家大半烏有に歸し、母と共に逃れて阿蘇山下にかり住居した。噂に聞けば父は賊軍に投じ、而も賊軍は城山の一戰で敗北という。母は父を憂えて病床に臥し、父に逢うことも出來ず死んでしまつた。悲しみにくれていると、去年思いかけなく父が還つて來た。母の死をきき父は泣いたが、娘の慰めで父子樂しく暮すことになつた。すると父は或朝獵に出て、そのまま歸えらず、心配のあまり山を尋ね歩き今御僧に逢つたのである。少女の本姓は本多、名は白菊、父は昭利、母は阿竹、別に兄昭英がある。昭英は放蕩に身を持崩して家から追出されたのであつた。少女が兄の事を語ると山僧は忽ち顏色をかえたが、少女はそれに氣が付かない。少女はその夜夢に父が深い谷に落ちて苦しんでいるのを見た。（第一齣）夜明けて少女は更に豐後との境にまで父を求めて歩いたが行方がわからぬ。忽ち山賊あらわれ捕えられた。山小屋で山賊達は少女を前にして酒宴を張り、古琴を彈ぜしめた。琴の音いかにもものすごく聽くもの感に堪えない程である。この時何者とも知らず、この席に飛込み矢庭に數人を切り倒した。それは外ならぬ山僧で、賊を斬り拂つて後、月下にはじめて兄なることを告げる。兄の語る所によれば、出郷後江戸に學んだ。先ず敬宇先生の門に入り修身の書を學び、父の養育の恩の高きを知つた。勉學の暇には父、母、妹のことを思い出した。そして今までの不幸の心を改め歸省して父に仕えん決心したが、あたかも故郷は戰雲に閉され、歸つて見たものの、懷しき家は既に跡形もなかつた。やむなく山中に入り、廢寺を借りて人間の事を拋棄しようとした。古經に眼を曝し、日の經つのも忘れていたが、思いがけなく妹に會い、その時名乘らんとしたが、身を恥じて默していたのである。然し今妹を助け、これ迄の罪の償ひをしたので潔く切腹せんと決意する。妹は極力差し止めた。（第二齣）兄は妹を連れ、未明に山賊の家を出た。然し討ちもらされの山賊が追つて來たので兄は彼らと戰い、又しても二人は別れねばならなかつた。やつと逃れた少女は道のほとりの祠で兄の無事を祈つていると、百姓爺が通りかかり、事情を打明けてしばらくその家に止る。兄は歸えり來ず、少女の容姿の美しさが村の評判となり、その村の長から嫁取りの案内があつた。爺は簡單に承諾し少女に言う。少女は驚く。少女の胸には意中の人がある。それは亡き母の語つた所によると、自分は捨子で、雪の如き白菊のほとりに捨てられていたので、白菊と名づけ、成人の後、子息の昭英の婦にするというのであつた。兄といふもののその兄は我が夫であると少女は固く思い込んでいた。村長の家に迎えられることに迷惑を覺え、ひそかに決意して、婚禮當夜、抜け出て家の前の急流に身投げしようとした、後に人あり、しつかと抱き止められた。驚き見返れば……少女は氣も狂わんばかりに喜んだ。夜明ける共にこの二人は故郷に歸える。阿蘇山下の芳屋は昔のまま、門を押し開き入ればそこに夢寐にも忘れられぬ父が居た。父はいつかの少女の夢の中にあらはれた通り深谷に陷り、上る事も出來ず苦しんでいたが、群猿が枯藤蔓のさがつているのを指して、谷の頂で泣き叫んでい

るのを見、こころみにそれにすがつて、谷を脱出することが出來た。母は亡いが今や親子再會して、すべて目出度く落着したのである（第三齣）

さながら一篇の物語である。それを漢詩で歌つている所にこの作品の特色がある。少女の運命に纏る悲哀の人情に、漢詩的な景致の描寫を織り入れて一種のロマンチシズムの匂を漂わしている。ただこの詩には、作者の態度が傳統につき過ぎているために、少女のあわれな運命をのみ強調しようとして、一歩深く人間を究明しようとする所がない。漢詩という形式が然らしめるのでもあろう。この詩の終りに、「登來群猿無迹、蟬聲如雨滿山背、誰知義氣亡人間、却存獸中寔可惜。」とある所、作者の大に誇りたい所であろうが、私にとつて特別に感動せしめるもののないのは殘念である。ここの直文の和譯は「浮世のならひと言いながら、うき世の常と聞きながら、人になさけのうせはてて、獸にのこるぞあはれなる」となつていて、巽軒の詩よりも尙理窟ぽくつまらない。總じて漢詩の方が和譯の方よりも情緒的であると私は感じる。しかるに直文の方がもてはやされて有名になつたという事は、要するに我々の詩は我々の言葉によらねばならぬ事を教えている。江戸時代に教養社會にもてはやされた漢詩が明治になつて次第に衰えて行つたのは教育の變化のためだけではあるまい。『巽軒詩鈔』は明治の漢詩集の中でも特に注意すべきものであつた筈であるが、「新體詩抄」程に取扱われていない理由もそこにある。しかし明治文學の出發に際し、漢詩調が浪漫的情緒を驅り立てたと見る時、『巽軒詩鈔』以上に尊重すべきものは中野逍遙の作品集である「逍遙遺稿」であろう。巽軒は決して多情の詩人ではない。彼の詩には惻々として人の心を打つものに乏しい。成程、佳人や美人の語も詩中に出ているが、内心から美を想う心を歌つているのか疑わしい。理智的な人であるから、詩調も何となく理智的で靜かである。之に反して逍遙は多情の人である。正岡子規が彼を評して「多情多恨の人なり、多情多恨の人を求めて終に得る能はず、乃ち多情多恨の詩を作りて以て自ら慰む」と述べたのはよく評し得ていると思う。多情多恨なる餘り、逍遙の美を慕う心持は、或點では柳北の情痴に通うものを持つているようであるが、柳北ほどに世間ずれしていないのがよい。隨て人生に對する考え方が青年らしく慷慨的で、ややもすれば感情が表面的になる恐れがあつた。こういう恐れはとかく漢詩調につき纏うものであり、逍遙といえどその恐れを脱することは出來なかつたのである。中江兆民もその『一年有半』に「崇重典雅の樣をあらわし、悲壯慷慨の狀を寫すには漢文崩し最適當なるを覺ふ」といつている。『花柳春話』『經國美談』『佳人の奇遇』という文章の系列は、當に兆民のいう二つの系列に屬するもので、『巽軒詩鈔』も『逍遙遺稿』も醇乎たる漢詩漢文であるが同じくこの系列に入るべきものたるは言う迄もない。

『逍遙遺稿』は正編、外編二冊あり和裝本である。中野逍遙、名は重太郎、伊豫宇和島の人である。東京大學で漢文學を專攻し、漢文學科に最初の學生として入學、明治二十七年に卒業したが、その月十六日に病歿、年齒廿七歳（明治元年生）であつた。早熟の秀才といわれ、明治十六年、東京に出で成立學舍に學ぶや既に俊秀の譽を高くした。友人の傳える所によると彼は漢文學を專攻し、隨て漢詩、漢文を愛好するは、いうまでもないが、一方泰西詩人にも心を寄せ、シルレルを理想派なるの故に最も慕うたということである（逍遙遺稿外篇、雜錄、中野君志想ノ一斑、

橋本夏男による)。彼がシルレルを愛したのは、シルレル傳をよんで、シルレルが大學にあれば大學の無味な學科に反抗し、社會の人となれば又、俗な社會にたてつき、好きな演劇が見たいばかりに、職場を逃走したり、その結果先輩からは不興を蒙り、故郷では面白からぬ評をせられるなどいうそこに大いに感動したためであつた。一反に與えた書の中に「世の人に向てわが思ふ如き熱情を望むことゆめゆめかたかるべく、むしろ超然主義冷然主義に身を置て動物の如き世人の眠をさまさんこと詩人の職分ならんかとわれは思ふ」と慨嘆した彼でもあつた。その作る漢詩に籠る沈痛の情緒はかかる彼の人間觀から生れ出たものと思う。

偶成

書足記名文達意、　一時快舌悅凡夫
右軍之妙麻翁字、　絕代風神天下無

麻氏稱英國碩學麻高禮

譯本邦俗曲

折紙片兮掩纖眉、　皓齒新涅碧凝脂
顧郎笑問結得好、　芙蓉廣帶綴金絲
欲呼新人還掩口、　不似紅樓選夢時

數ある作品の中から僅かこの二作を例示するのは不充分であるこという迄もないが、一は Macaulay (一八〇〇—一八五五) を賞し、一は日本の俗曲の漢譯である點に、彼の思想と趣味を知るよすががあると思つたまでである。逍遙遺稿には尙短歌がのせられているが、漢詩ほどの熱情はくみ取られぬにしても、まま彼らしい力强いものがある。

ともしびのひかりにかげはさえながらにほひにくもる秋の夜の大刀
秋風に月の夜道をふみならし駒のうへながらながめてしがな

よき歌ではないだろうが、淺香社の與謝野鐵幹の初期の歌調にやや通うもののあることに注意してよかろう。島崎藤村が若菜集で逍遙の「思君十首」にもとづき、哀歌をうたつているのも、藤村が逍遙から、どれほどかの影響を受けたことを物語つているのである。

× × × × ×

明治文學に於てロマンチック情緒が純粹な文學の大道への出發であると見る時、漢文[註3]漢詩の教養は忘れることの出來ないものである。息軒、敬宇などの大家が思想發表に漢文を使つたことはともかく、「巽軒詩抄」も附錄に見るが如く、堂々とおのれの思想[註4]を漢文で發表したのである。これらの論は若き日の巽軒の思想を知るに缺く可からざるものとして今殘されているのである。諭吉の如く思い切つて舊慣を打破するのも一つの思想であるが、文學は彼の論の如く、直に漢詩漢文もしくは雅文を絕緣することが出來なかつた。明治二十二年のかの「於母影」が西詩の飜譯を主にするものであつたとはいえ、その浪漫的情緒の主調となつているものは、漢詩及び雅文であつたことをここに强く注意しよう。

(註1) 若彼(レ)與皮(レ)亦卽 Book Poetry 之略。皆係文雅之事矣。書册詩學

(註2) 江戸繁昌記の名稱は靜軒の著書に先つて、天明乙巳秋七月の四方山人の序題のある狂詩江戸繁昌記—腹唐稲人著—がある。

(註3) 柳田泉著、政治小說研究に宮崎夢柳—虛無黨小說、鬼啾啾の著者—が岸田俊子後の中島湘烟女史と漢詩の應和をしたことが書かれている。巽軒。逍遙の漢詩とこれと必然的關係をつけ得べきもので、明治文學の出發はとにもかくにもここらあたりからであることを知る。

(註4) 奇(ニ)中村敬宇翁(ニ)書、の中で巽軒は詩文に就て敬宇と論爭している。